

月は満ちて

三鷹奇異高

突然に

「山口！」

翌朝、ホテルのチェックアウトの手続きをフロントで済ませているといきなり聞き慣れた声で呼び止められた。

振り向けば、そこには今一番会いたくない鍋島の姿があった。

「な、なんだ鍋島じゃないか」

俺は動揺を隠せず戸惑いながらも必死に平常心を装い声をかけた。

「なんだじゃねえだろ！」

鍋島はそう怒鳴りつけ、何故だか分からないが不機嫌オーラ満載だ。

「なに？ やけに機嫌悪いんだな。もしかして今から仕事か？」

朝の十時にホテルのフロントで鍋島に出くわすなんて、まず考えられるのは締め切りに追われたいつもの缶詰しかない。

それだったらこの機嫌の悪さも理解できる。

だが鍋島は益々眉間に皺を寄せ、

「なに寝ぼけた事言ってやがんだ！ ちょっとこい！」

と怒鳴ると無理矢理腕を捕まれた。

俺は奴の理不尽な振る舞いに怪訝な顔を顕にすると、

「な、なにすんだよ！」と、その手を払い除けた。

傍から見ても二人の不穏な空気にロビーでチェックアウトを待っていた室長が心配して飛んできた。

「マサヤン、どないしたん？ なに揉めとんのや」

室長は俺と鍋島の異様な光景に訝りながら声をかけてきた。

すると思わぬ第三者の介入に鍋島が面倒だと言わんばかりに舌打ちした。

その仕草に温和な室長も眉間に皺を寄せ怪訝な顔をする。

今度は俺を介して室長と鍋島が互いに睨み合うという険悪なムードに取って代わり、

「な、なんでもないんです。こいつ大学時代の顔見知りだったのに俺がすっかり忘れてて、ちょっとびっくりしただけなんです」

と苦しい言い訳をした。

「そう言う事なんで、色々積もる話もあるんで…いいですか？」

と鍋島は俺の話に上手く調子を合わせると到底頼み事とも思えない好戦的な態度で室長にお伺いを立てた。

「すぐ済むんならええけど…新幹線の時間あるしな」

と室長は悠長な口調で、フロントの上の掛け時計に目を遣る。

「新幹線って…なんだ、今から出張か？」

と鍋島が見当外れのことを聞いてきた。

どうやら俺が引越したことさえ知らないらしいと分かり、なんだか『今は大阪だ』と返事をするのさえ馬鹿らしくなってきた。

「そうですねん、こっちに出張でこれから大阪に帰るんですわ。そやからあんま時間ないんですわ」

と自暴自棄的な俺に変わり室長が応えた。

「大阪帰るって…お前、今どこにいるんだ？」

鍋島のこの今更の言葉に俺は一気に脱力した。

(どこにいるだって…)

だがその呆れた事実にそれまでの動揺がまるで嘘のように治まり、徐々に冷静さを取り戻させた。
「あれ？ 知らなかったんだ。俺、随分前に大阪に転勤になったんだ。あれから何ヶ月も経ってるからてっきり知ってると思ってるよ」

と、これ見よがしに皮肉る余裕さえ出てきた。

今の今までそれさえも知られていなかったという悲しい事実はこの際どうでもいい。

「なっ！ お前…」

鍋島が何か言いかけようとしたが、

「じゃあ、そういう事なんで…鍋島、元気でな。室長そろそろ行きましょうか」

俺は早々に話を切り上げるとアタッシュケースを持ち、室長にホテルを出ようと促した。

「ああ、そやな。ほな帰ろうか、帰ったら愛のたこ焼き食わしたるからな」

と、室長は何故か場にそぐわない冗談で茶化した。

「な、なに言ってんですか！ こんなところで。行きますよ」

俺は室長の揶揄いに顔を赤くしながらもその場を足早に立ち去ろうとした。

もう後ろも振り向かない。奴がどんな顔しているかなんてどうでもいい。

多分、今から缶詰なんだろう。

俺の転勤も知らなかったようだし、でなければこんな所で会う筈もない。

そう思いながら昨夜の『神楽』でのツーショットが脳裏に浮かび、もしかしたら彼女と二人で宿泊だったのかも知れないと邪推した。

それよりたった二泊三日で二度も出くわすなんて、なんて間が悪いんだろうと自嘲する。

俺はそんな考えに悶々としながらも一人待っている太田さんの元へ急いでいると再び後ろから腕を捕まれた。

しつこい相手に一言文句を言おうと振り向くと、

「室長さん、大事な話があるんです。お願いですから山口と話をする時間頂けませんか？」

と鍋島は俺ではなく、驚きに目を剥いている室長相手に真摯な態度で頼んできた。

一瞬の間があり、

「マサヤン…もう週末やし、東京も久ぶりやろ？ ゆっくりしたらええわ。来週の月曜出社でええさかい」

と、室長は俺に残れと言わんばかりの口調だ。

「し、室長！ いいんです。話なんてありませんから、一緒に帰ります」

と俺は必死にその提案を却下すると、

「あかん…山口、ちゃんと話おうて、きちりせな」

珍しく苗字で呼ばれ、おまけにいつになく真面目な口調で諭された。

「……」

その刹那、俺は奴との関係を知った上での室長の説得なんだと分かり言葉を失くした。

室長は愕然とする俺の傍までくると、

「ちゃんとケジメつけたほうがええて、その方がリセットしやすいやん」

軽く肩にタッチし告げられ俺はその言葉に小さく頷いた。

室長の忠告に従い抵抗するのを諦めた俺は鍋島の横で、室長達がホテルの玄関を出て行く姿を見送った。

それを合図に奴は行き成り俺の手を引っぱり、場所を変えようとした。

「ちょっ！ なに？ 話ならここでいいだろ」

と抵抗すると、

「いいから、こい！」と、いつもの強引な奴の口調だ。

昔からこうだ。有無を言わせない俺様口調。

俺は悠長にも相変らずだと思わず苦笑してしまった。

だが行き先がどうやらエレベーターだと気付き、
「ま、まてよ！ どこまで行く気だ」と慌ててその手を払い除けようとした。

だが肩を抱え込められ雁字搦めに拘束されて微動だもしない。
両手の荷物を離せば撥ね除けられたるうに、俺は動揺からかその考えを失念していた。
そのまま奴に引き摺られるようにエレベーターに乗り込んだ。

「お、おい！ 敦夫！ いい加減にしろよ！」
俺はやっと二人だけになった空間で奴を怒鳴りつけた。

「うるさい！」
と、一喝され、そのまま奴は俺の顎を捕らえると貪るような口づけを仕掛けてきた。

「っ！ んんっ！」
あれだけ握り締めていた荷物が手から滑り落ち、その手は何年も重ねた情事で手馴れた習性そのままに奴の髪を掴んだ。

やがて角度を変えながら唾液の交じる舌を絡めたディープなものを受け入れていた。
悲しいほどに空しい行為。
頭の片隅で警告しているのに、体に染み付いた懐かしい臭いが何もかもどうでもよくしてしまう。
それは別れた後の三ヶ月の苦行が霧散した瞬間だった。

やがてその激しい口づけが一気に下肢にまで及ぶ。
理性の箍が外れると人間なんて無力なものだ。
エレベーターから降りると唇は離れたが、そのままズルズルと引き摺られる。
慌てて荷物を拾い上げ、有無を言わせぬ相変らずの強引さに閉口しながらも付き従う。
どこに行くのかと思っていたら、廊下の先に清掃中のワゴンカーが目にとまった。
それを目指して突き進むと、開け放たれたドアをノックする。

「はい」
と、すぐにホテルの清掃員が返事をし、中から顔を出した。

「ここ、清掃終わった？」
唐突な鍋島の問いに彼女は目を白黒させながらも、

「は、はいたった今…」と終了した事を告げた。

「じゃあー、この部屋使うから」
そう言うと鍋島は俺を引き連れて中へ乱入しようとした。

だがこれには流石に彼女も慌てて、
「お、お客様！ こ、困ります！ あ、あの…」

鍋島の暴挙を止めようと必死である。
奴はそんな事などお構いなくズケズケと中に入るとホテルの備え付けの電話の受話器を取る。

相手は何コールもしないうちに出たようで、
「あ、支配人お願いします。鍋島と言います」

奴は手馴れた口調でそう告げた。
取次ぎでもしているのか暫し間が空いた後、
「あっ、外村さん？ 鍋島です。はい、まあ相変らずですよ。ええ、それで厚かましいお願いなんですけど、部屋を至急用意して欲しいんですよ。ええ、あっ！ いえ今からじゃなくて、えっと…ちょっと済みません」

と一旦、話を中断すると

「ここ何号室？」

と傍にいた清掃員の彼女に尋ねた。

「は、はい507号室です」

鍋島の迫力とどうやら支配人と話しているというのが分ったからか、彼女は即答した。

「もしもし、済みません。507号室です。ええ、清掃は終わってます。ああ…助かります。無理いいまして、鍵はいいです。商談で…ええ、ありがとうございます」

どうやら交渉は成立したようだ。

「支配人に話は通したから、もう問題ない」

と鍋島は彼女に解決したことを告げた。

彼女は呆気にとられていたがすぐに我に返ると、

「し、失礼しました。えっと…あの鍵はとりあえずスペアキーを置いておきますので、お帰り際にフロントにお返し下さい」

とおずおずとテーブルにカードキーを置く。

「ああ、助かるよ。行き成りで済まなかったね」

とさっきまでの陰悪なムードを一層するようににこやかに微笑む。

それに答えるように彼女は大きくお辞儀すると部屋を後にした。

俺は一連の遣り取りを茫然と見ながら入り口付近に佇んでいた。

すると奴は透かさず傍までやってくるとまた俺の顎を掴み顔が近付け様とした瞬間、

「ロビーで済む話だ」と俺はその手を払い除け拒んだ。

奴は一瞬嘲笑したように口角を上げると、

「ふん！　なんで連絡しなかった」

と行き成り何の脈絡もない話を振ってきた。

「はあ～？　それはこっちの台詞だっ！　俺が大阪転勤になって何ヶ月経ってると思ってんだ」と呆れて怒鳴ると、

「俺には正当な理由がある」と全く悪びれず、それどころか開き直るか如く横柄に言い放った。

そしてその正当な理由とやらを奴は「携帯を失くした」の鶴の一声で終わらせた。

(はあ～、なんだそれ)

太々しいまでのドヤ顔の鍋島に情けないやら頭にくるやら…沸々と怒りが込み上げてきて、

「それと俺に連絡しなかったのと何の…」

と言いかけて、奴の唯一とっていい致命的な欠点を思い出した。

「お前、まさか…アドレスとかバックアップしてなかったとかいうんじゃないだろうな」

「ああ…そのまさかだ。一々そんな面倒臭いこと出来るかよ」

と開き直られ、俺は怒りモードも吹っ飛ばすくらい愕然とした。

だがすぐに冷静になり、

「相変らずだな。それくらい常識だろ。それにそんなら嶋田に聞けばいいだろ」と何の手立てもしなかった事を詰った。

「それが卓の奴、暮れになっても一向に姿を見せなくて…年明けにやっと顔を出したんで聞いて連絡したら…」

そこまで言うとな鍋島は携帯を取り出し、短縮ダイヤルでどこかに発信すると、

「お客様がお掛けになった番号は現在使われておりません。もう一度…」

と定番のガイダンスを聞かされた。

「嶋田も驚いていた。十二月の初めにはお前と忘年会の話をしたと言っていた」

鍋島の顔は妙に冷静で、俺は逆に証拠を突き付けられた犯人のように焦った。

「携帯、新しくしたんだ。ほら、随分長いこと使ってただろ…それで携帯会社を変えたついでに番号も新しくしたんだ。番号ポータビリティだと手数料結構かかるみたいでさ…」

「番号変えたんなら何で知らせないんだ」

鍋島は容赦なく問い詰める。

俺は段々追い詰められていくような息苦しさを感じた。

「あのさ、俺もお前と同じで失くしちゃって…前の番号とかアドレスとか全部ペアでさ、ヤバイのなんのつて…」

「お前の事だ、控えとってたんだろ？ 常識なものな」

と、さっきの意趣返しとばかりに俺がなじった台詞をそのままに返された。

チェックメイトだ。

俺はまんまと墓穴を掘らされていた。

相変わらずは俺の方だった。

昔から詰めが甘い。

俺は壁を背に力なくその場にズルズル座り込んだ。

「悪かったよ… もう二度と会わない心算で全部抹消したかったんだ」

と白状した。

「なんの意味があるんだ…」

と敦夫の一言に言葉を失った。

「あっ…ははは」

乾いた笑いしかなかった。

そうする必要があったのは俺で、奴には全く意味のない事だった。

そう思うと悪足掻きするのが段々どうでもよくなってきた。

本当にどうでも…。

俺は背広の内ポケットから携帯を取り出すと空で覚えている奴の番号を打ち込み発信した。

すると奴のブルゾンの内ポケットが振動する。

奴は慌てて携帯を取り出し、見知らぬ番号を不審がる事もなく耳に充てた。

「はい、お久～」

とリアルタイムに耳に聞こえる俺の声に茫然としている奴に手を振りながら、俺は短いコメントで通話をブチ切った。

「新しい番号だ。登録よろしく」

と俺は携帯を掲げて見せてそのまま胸ポケットにしまう。

「ああ…」

鍋島は生返事をするそのまま慣れない登録作業に没頭し始めた。

この男、頭は切れるが無類の機械音痴だ。自宅にパソコンはあるが使用しているのは奴の担当の編集者だ。携帯も編集担当から無理矢理持たされているくらいだから未だに使いきれていない。

「んじゃ、これで用件はすんだな」

と俺は奴が携帯に躍起になっている隙に退散する事にした。

重い腰を上げ荷物を手に入り口に向おうとすると、

「おい、待て！ どこ行くんだ」と再び呼び止められた。

「どこって… 何言ってるの帰るに決まってんじゃん」

俺は素っ頓狂な顔でそう答えた。

「馬鹿言うなよ！ なんのために部屋とったと思ってるんだよ」と鍋島が怒鳴る。

「……」

その言葉で奴の腹が一瞬で読め、俺は立ち竦む。

だが意を決して、

「もう…そういうのは無しにしないか。携番はこれからも友達って事で教えたんだ」

「なんでだ」

「な、なんでって… 俺、今付き合ってる人がいるんだ」

これにはピクリと奴の眉毛が上がる。

「もしかしてさっきの大阪野郎か？」

「…や、やっぱ分る？ だよな…愛のたこ焼きなんて結構軽いノリの人なんだけど相思相愛なんだよ。これが！」

「だからさ、もうフラフラしたくないんだ。真っ直ぐ歩きたいんだよ」

「俺のが寄り道っていうのか」

と鍋島の相変らずの自己中振りに、

「お前こそ寄り道だらけだろう」

と言り返して苦笑した。

だってお前の真っ直ぐな気持ちは現在、片恋の進入禁止だもんな…。

そう思うとなんだか一番可愛そうなんじゃないかと思えてきた。

そして昨夜の冴えない女の顔が脳裏に浮かぶ。

(そうか…俺にまだ手を出すって事は彼女も寄り道なんだ。

こいつ馬鹿！ 本当に馬鹿！

いつまで生産性のない生き方すんのかねえ～)

「誰がいつ寄り道だ！ くっそお～、とっとと愛のたこ焼き野郎んとこ帰りやがれっ！」

と鍋島は不貞腐れて捨て台詞を吐く。

そういう俺も大概の馬鹿だと思いながら、

「最後に…するか」と臭わせた。

奴は俺の一言を聞き逃さず、「いいのか？」と上目遣いに目を合わせる。

「ああ、餞別代りにとっとけよ」

「それ、反対なんじゃないか…」

「そうだっけ？」

俺は苦笑しながらネクタイに手を掛けた。

奴の傍まで歩み寄るとそのまま唇を重ねる。

そして鍋島をベッドに押し倒すと俺は馬乗りになった。

(敦夫…俺を手放した事を後悔するくらい気持ち良くしてやるよ)

そう内心で毒づく俺は体に欲情の熱を灯らせた。

妖艶な眼差しと…エクスタシー全開の激しい口づけで蕩けさせて…

身体中をいつにない欲情の熱が駆け巡る。

幾重にも重なる逢瀬の日々が

その柔肌に蘇り
忘れるものかと嘲笑う
それならばいっそ燃えつくしてやる
跡形もなくなるまで…

激しい情交に力尽きて横で寝息を発している男の陰りのある顔を見つめながら、あの日目にしたおぼろに映る水面の月を思い出した。

『月は満ちて…
薄い金糸雀色の光彩が水面を波立つ。
かけゆく月の名残のように…あなたの吐息が纏わりつく。
不実な月がその姿を変える前に…お別れします。
夜のしじまに紛れて、行く道を照らしてくれる今のうちに』

「俺…愛のたこ焼きまっしぐらするから…お前もはよう吹っ切れるよう頑張れや」
と仕様もないエールを送り、一人ほくそ笑んだ。
なんかすっきりした。室長が言ったようにこれで綺麗さっぱり忘れられる様な気がする。
だけど…結局なんで今朝ホテルのロビーなんかにいたんだ。
それはすごく重要な事のような気がしたが…これで最後と思えばどうでもいいかと疑念を断ち切った。

だが、下手な情けが婀娜になった。

東京出張から帰ってきて二週間目。
今日は室長がたこ焼きをつくり俺のマンションまで来る。

玄関のチャイムが鳴り、てっきり目当ての人だと慌てて出ると、
「なんでお前がおるんやっ！」と俺は意外な人物の出現に開口一番で悪態をついた。
「なんでって… お前完璧大阪ナイズされたな。ほら、これ挨拶がわりの手土産だ」
と渡された浅草名物雷おこし。
おまけに図々しくも靴を脱ぐときさっさと狭いワンルームの中へと入ってくるじゃないか。
俺は慌てて後を追い、
「ちょー、誰が上がってええゆうた！ つーか、はよ東京帰れ！」
「おいおい、態々大阪まできてそれはないだろ。それに今日越してきたばかりなんだぜ」
信じられない言葉に度肝を抜かれ、
「こ、越してきたって…」と俺は恐る恐る尋ねる。
「ああ…、例のコラムの女がまた居座りやがって…あっち明け渡してきた。ま、俺の仕事はワープロとファックスさえあつたらどこでも出来るからな」
「どこでもって…こっちに引っ越してきたんか？」
「おう、だからさっき挨拶代わりに手土産っていったじゃねえか…」
「な、なに考えてんのや、このアホがっ！」
「なんだよ、態々大阪まできてやったのにその言い草は」
「誰も頼んでへんわ！ それより今から客くんねん。はよ、いね」

「あっ、もしかして愛のたこ焼き野郎か？」

ずばりの中され、俺の目が一瞬泳いだ。

「……」

しまったと思ったが後の祭りだ。

奴はにやりと口角を上げると、

「なら俺もゴチになろっと」

「何考えてんのや！ いっぺん死んでこい！」

とふざけた言葉に怒号が飛ぶ。

なんか… 頭いとうなってきた…。

そんな修羅場に無情の如く、再び玄関のチャイムが…

ピンポ～ン

俺はこの絶体絶命なこんな時に何故か幼い頃、よく揶揄われたフレーズが頭の中を流れた。

『山口さんちのまさし君、この後きっと変よ。

どうするの・か・な？』

完